碧山寺　龍泉寺　鎮海寺　南山寺　竹林寺　普化寺　応県木塔　懸空寺　善化寺　九龍壁　上下華厳寺

碧山寺：（佑国寺、極楽寺、善徳堂）とも言われてきた。（法要で入れません）1268 年明代の建立。碧山寺**五台山台怀鎮から東北へ2km、北台山麗に位置する「碧山寺」は、五台山で最も大きな十方禅寺である。北魏時代に建てられ、明時代に修復されたこの寺は、かつて「普済寺」「護国寺」「北山寺」などと呼ばれていたが、清時代に「碧山寺」と改名された。寺内の主な建築物「天王殿」「雷音殿」「戒堂殿」「弥勒殿」や、像の数々も、清時代に造られたものである。「十方」とは、あらゆる出家僧人や居士が、無料で食事ができ泊まれる場所を指す。このような場所であることから、各地から僧達が集まり、評判は東南アジアまで及んだ。かつてこの地を訪れた「虚雲」「円瑛」「印光」の三人は、海外へと出向き、経典を伝えた。アメリカの禅宗も、「虚雲」達によって広められたのである。寺内には、シンガポール、マレーシアの教徒から贈られた、「銅版」「火典」、ミャンマーからの「玉仏像」がある。**

碧山寺バス停

山門

奥には大きな本堂

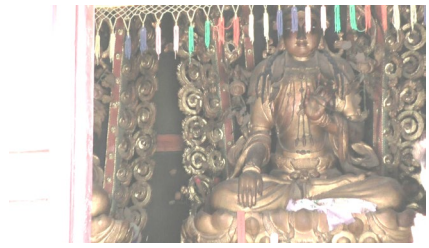
龍泉寺：108 階段を登る。「家廟」（一族の祖先を祀る場所）から「仏教寺廟」へと変わった建築物である。宋時代に建造され、もとは楊将軍の「家廟」である。その後明時代に修復、清時代に増築され、南山寺の下院となる。東側には「龍泉」と呼ばれる美しい泉がある。石段を登った入り口に建つ「石碑坊」は、「漢白玉」の透かし彫りに、上面は飛龍、宝鏡、玉壷等の図案が施されており、石彫り芸術の逸品とされている。「龍泉寺」は、主に「天王殿」「観音殿」「大雄宝殿」から成る。「天王殿」正面には、白色の岩石に菊・梅・蘭等の彫刻、殿内には「弥勒仏」「韦陀」「四大天王」「哼哈」「降龍伏虎」が祀られており、これらは清時代末「五台山九宮道仏寺」の特徴とされている。「観音殿」には、「観音菩薩」を中心に、左右には「文殊」「普賢」、壁には「十二円覚菩薩」の彫刻、また「大雄宝殿」には、「釈迦仏」「十八羅漢」が祀られている。「天王殿」右側の大院を入ると、壮大な「「普済墓塔」がある。塔下部には蓮花や 100 余りの「小座仏」、周辺には「経文」「弥勒仏」、「普済」和尚の肖像が彫られている。西院には南山寺二代目住職「岫净文」の墓塔がある。龍泉があることで名付けられた、漢白玉彫刻牌坊巧みに彫刻されています、龍泉寺は九龍崗の山腹に位置することから、九龍崗寺とも呼ばれている。境内の脇に「龍泉」という湧水地があり、龍泉寺という名を得た。龍泉寺は宋代に創建され、清末に重修された。照壁には五台山の寺院配置を描いたレリーフが刻まれており、そこに「仏母堂」という岩窟を発見した。

手の込んだ見事な透かし彫りの石碑坊・石彫り芸術の逸品

寺の入り口も立派です

山号閣も立派・額淵は龍が彫り込である。　右に鐘楼　左に鼓楼

山門の奥の二本の塔何ですか。　豪華な文殊殿　豪華で立派な文殊殿



中には獅子に股がつた文殊菩薩　山号額も立派ですが回りに彫り物も立派　豪華な観音菩薩

伽藍の入り口には戸に立派な龍の絵が描かれています　十八羅漢

六角の古い白塔には何故か布袋様　色鮮やかな立派な四天王　釈迦仏・前ジョクには立派な龍

鎮海寺：チベット仏教で清代１８世紀ころ内モンゴル有数の活仏・章喜活仏の避暑寺聖地五台山の中では現在無名の寺院だが、かっては、内モンゴル有数の活仏の避暑地であった。五台山の西のはずれ、洪水を鎮める鎮海塔で名づけられた。清順治帝出家地の舎利塔がある、塔には、釈迦如来のレリーフが刻んでいます。髭付け観音様が祭られる。

見事な山号額

山門入り口正面に何故か布袋様

四天王

四天王

右に鐘楼

左に鼓楼

豪華な本堂・戸には龍が描かれています。

観音菩薩

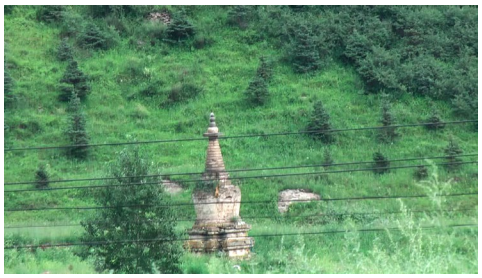
境内の中央には白塔

釈迦の生涯が六面に描かれています

釈迦誕生

釈迦が悟りを得た場面

釈迦の涅槃図



泉が湧いた場所に鎮海塔（白塔）

南山寺：（佑国寺、極楽寺、善徳堂）創建、1268 年石碑ある、民国再建、仏教、道教、儒教三教を石彫刻となる、西太後により、真如自在文字が賜った、眺めが良くて、階段がきつい。

五台山の中で最も大きい寺院で元代の創建である。寺院は、7 層あり、三つの部分からなる下部の 3 層は極楽寺、中間の 1 層は善徳堂、上部の 3 層は佑国寺という。

南山寺

きつい階段です

豪華な石碑坊（山門）

豪華な本堂

山号額の立派です

千佛殿

お釈迦様の前には何故か布袋様

ひげをはやした釈迦像

五台山で始めて見ました羅漢堂

左右に何人の羅漢達ですか？

ここにも立派な白塔

境内に笛を吹いているお坊さん

大きな寺、本当に山の頂上

道中山中に白樺並木

竹林寺：円仁が修行した寺である。『入唐求法巡礼行記』によれば、円仁は 840 年に竹林寺を訪れたのち台懐鎮南部の金閣寺で霊仙三蔵の事跡を偲んでいる。霊仙三蔵は最澄・空海と同年輩で、南都興福寺から唐にわたり、台懐鎮の金閣寺で修行した僧である。竹林寺は文化大革命によって壊滅的な被害をうけ、歴史的建造物は明弘治年間の白い舎利塔しか残っていない。境内全域におよぶ復元工事が進んでいた。その様式は「唐代」だというから、まさに円仁がいた時代の建物を復興しようとしている、改築中、舎利塔がある。村里はなれ山中の中腹に広大な土地に幾数年もついやし建設中。日本からも資金が出ているとの事。

慈覚大師円仁：円仁は、838 年から 847 年までの 9 年間にわたる中国での旅を、『入唐求法巡礼行記』に著した。これは全 4 巻、漢字 7 万字からなる世界的名紀行文である。仏教教義を求めて巡礼する日々の詳細を綴った記録は、同時に唐代の生活と文化、とりわけ一般庶民の状況を広く展望している。さらに 842 年から 845 年にかけて中国で起きた仏教弾圧の悲劇を目撃している。後に天台宗延暦寺の第三代座主となり、その死後、「慈覚大師」の諡号を授けられた。

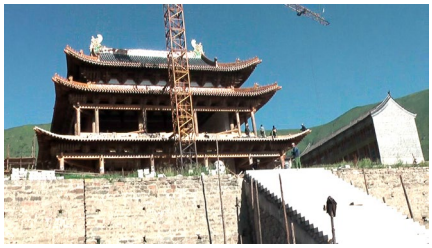
五台山到着は、疲労困ぱいの旅路の果てのクライマックスであった。ロバを小さな僧院に預けて、円仁と弟子たちは高い嶺を越えて名刹竹林寺を訪ねた。円仁はこの聖山に 2 カ月滞在し（840 年旧暦 5～6 月）、集中的に数ヶ所の寺で学んだ。ついに円仁は、中国の高名な仏教の師について学ぶ機会を得たのであった。知識の追求こそが、海を渡り、中国諸官庁に対してこの遠い聖地への徒歩旅行を決然と願い出た、究極の目的であった。別な堂宇すべてに案内されたが、その一つに白玉石の戒壇があった。五台山に到着して 1 週間後、円仁に同行した二人の弟子、惟正と惟暁はここで正式に具足戒を受けた。

嶺の上、谷の内に樹木はまっすぐに伸び、ねじ曲がった樹は一本も無い。……眼前の万物は、すべて文殊菩薩の化身ではないかという思いを起こさせる。文殊菩薩の聖霊の地では、同時にこの土地と自然に対する畏敬の念を生ぜしめる」。

聖武(しょうむ)天皇が、中国の五台山で文殊菩薩に会う夢を見られ、「わが国で、五台山に似た山を探すように」と、行基菩薩に命じられました。 土佐の五台山を選んだ行基は、神亀(じんき)元年(724年)、竹林寺を建立し、文殊菩薩像を刻んで安置しました。

円仁（慈覚大師）は五台山を巡歴し、比叡山に天台密教の基礎を築き、第三世天台座主を務めた。その円仁のお位牌を祀っているお寺。

新しい山門


大きな三重屋根の本堂

本堂への入り口門

唯一残された白塔

大きな鐘楼

鐘突き堂に収まる新品の鐘

完成された鼓楼

何年架かっての大修復ですか？大量の欅の原木に半加工された材料

宮大工と昔ながらの鋸引き　　山中に広大な境内　　7 月末なのにコスモス

普化禅寺（ふげんぜんじ）：浄土道場、民国時代巧みな石彫刻が特徴・**五台山台懐鎮の東隅の山麓にある寺院で、創建年代は不詳です。境内は森林で幽蒼とし、渓流が淡々と流れて 風光明媚です。**

非常に閑静な寺院で、慈悲の寺と言う。

普化禅寺の石碑

立派な石碑

細かい細工の立派な本堂入り口

立派な本堂

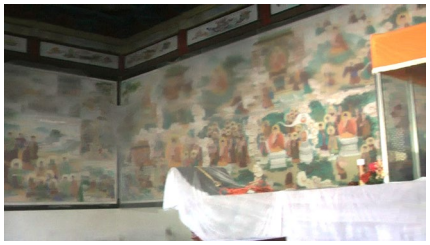
屋根先まで手が込んでいます

何故か仏様の前に布袋様

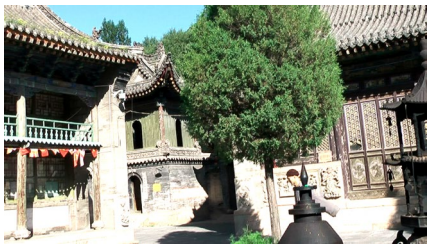
釈迦像

ケースに入った釈迦の金の涅槃像

涅槃像の右壁一面に仏画



左壁一面にも仏画



奥に鐘突き堂

広い境内

大同市：　人口 280 万人、山西省第二の都市である。五胡十六国の時代 356 年、北方民族・鮮卑族の拓跋珪（太祖道武帝）が北魏王朝を開き、398 年この地を都・平城と定めた。三代太武帝の 439 年、華北を統一（南北朝時代の始まり）、493 年に高祖孝文帝(6 代皇帝)が洛陽に遷都するまで 100 年間、中国北方の中心地として繁栄した。石炭の産地としても有名、日中戦争初期旧日本軍が石炭を求めこの地を侵略支配(山西作戦)した。さらに文化遺産都市としても有名。市街西側 16ｋｍの武州山南麓にある「雲崗石窟」は、中国最大の石窟寺院の一つ。東西１ｋｍに現存する洞窟が 53 窟、石像は 5 万 1000 体にのぼる。洛陽の「龍門石窟」、敦煌の「莫高窟」とともに中国三大石窟に数えられ、なかでもこの石窟は石像の雄大さと内容の豊富さ、そして高い芸術性で知られる。

応県木塔：僧侶居ない寺。正式には仏宮寺釈迦塔という。仏宮寺塔、遼朝の第 7 代皇帝である興宗（(こうそう）は遼朝の第 7 代皇帝）の外戚、蕭孝穆が遼の蕭太后の為に 1056 年建立、泥塑像の仏像がきれい。

現存する、中国最古仏塔、修復した時、地宮から釈迦の歯の舎利が見つかられた。中国木造建築珍品。**「造られたのは遼の時代、西暦1056年です。中国では最も古い、そして最も高い木塔といわれています。形は八角形で外見は五層だけど内側は9階建てになっています。」**高さ 67m、径 30m で、外観は 5 層であるが、内部は 9 層の八角塔であり、中国最古の木造建築とされる。塔が完成したのは、造立が始まった 1056 年から 140 年後であったとされる。1 層目には、高さ 11m の釈迦如来座像を祀る。また、1982 年に、塔内の像の中から、遼代の大蔵経の一部（12 巻）などの木版印刷物が発見された。

木塔の構造は、漢（紀元前 206～西暦 220）、唐（618～907）以来の民族の特徴である重ね式様式を採用し、設計全般は科学的で厳密であり、完璧な構造をもち、平面八角形を呈し、外から見ると五層だが、一層毎に暗層が付き、実際は九層である。それにどの層の外と中には二本の丸い柱があり、各層の外部には 24 本の柱、中には 8 本の柱が付いていて、その合間に多くの斜めの支え木、梁、角材などがあり、異なる方向に向った複雑な構造をなし、全体的には八角九層で、頂点は八角形で尖って鉄刹を立ててあり、この鉄刹とは仏教の世界を象徴する。またハスの花型の坐台は、相輪（塔の崇高さを表す）、火焔と宝瓶、宝珠からなる。塔のどの層に屋根の下に風鈴がつるしてあり、そよ風が吹くと風鈴が清らかに鳴り響く。この木塔は荒野にありながらも細やかに作られ、古風を表しながらも優雅さを失わない。この木塔はこれまで 900 年あまりの多くの地震などに耐えてきた。史書によると、木塔ができたから 300 年後にマグニチュード 6.5 の地震が起き、余震が 7 日間続き、他の建造物は崩壊したのに、この木塔だけが残ったとある。ここ数年、応県一帯では大きな地震が起き、木塔は揺れ動き、かの風鈴も鳴り響いたものの、木塔は壊されていない。また、近代の軍閥間の戦争でも、木塔は 200 発もの砲撃を受けたが全般的構造は破壊されていない。中国では多くの古代の高塔がかつての雷撃によって崩壊したが、この木塔だけはかなり大きな雷撃を受けても無事であった。この木塔はこれまでの災害に耐え抜き、どうして壊れなったのであろう？

実は、この木塔は科学的な設計と構造がものを言ったのだ。例えば、耐震力が強いのは、多層様式を用い、現代建築に見られる多くの手段が用いられている。次に、柔軟性をもつ材料を使い、外部からの強い作用があっても変形しにくく、また、ある程度の原型を回復する能力を持つこと、しかも組み立て構造での各節目にはいずれも凸部と凹部の結合方式を利用し、一定の柔軟性があること、木塔の四つの暗層は塔全体の構造を強化し、塔の大量の枡形は弾力を持つ節目の如く、外部からの強い圧力を受けてそれを軽くでき、非常によい耐震性能がある。また、この塔が雷撃を受けても破壊されないのは、頂上の長さ 14m の鉄刹が、装飾だけでなく、避雷針の役目を果たしているからだ。また塔の周りの 8 本の鎖は雷による電流を地下に導くのである。以上のような避雷装置があったからこそ、木塔はこれまで壊れずに済んだのである。応県の木塔は世界でも保存度か一番よく、構造が最も巧妙で、外観が最も壮観な古代の高層塔であり、この塔は、中国の古代の職人たちによる、構造的、力学的、耐震的、かつ避雷的各面での偉大な成果を現している。

佛宮寺釈迦塔の石碑

広い境内

全境内の中央部に白い観音像

右に鐘楼

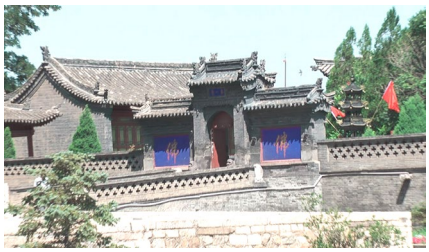
左奥に鼓楼

何故か入り口正面に布袋様

入って直に高さ 11m の釈迦如来座像

塔内第二層の塑像

どなた様の塑像ですか

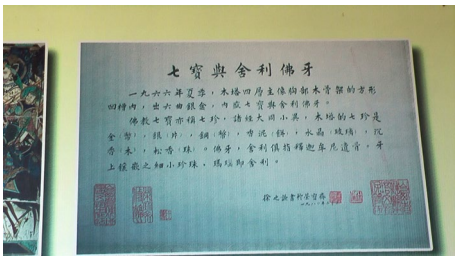


木塔の後ろには寺の入り口

木塔の上からの撮影広い境内

左後ろには新築中の大きな寺

佛牙舍利簡介



舍利佛牙の証明証ですか

舍利佛牙の写真

懸空寺：僧侶居ない寺。建立は北魏太和十五年(西暦４９１年)。渾源県の県城南方５キロ、恒山の主峰・天峰嶺の渓谷にある。岩にへばりつくように造られた寺院で、北魏代末期（６世紀初頭）の創建。谷底から 26m 上の絶壁に穴を穿ち、梁をさしこんで土台とし、その上に建物を建てた。そのため、山腹に張り付くように楼閣殿宇が展開し、その間を桟道で結ぶ。寺の下は急流で、建物は文字通り空に懸かっているように見える。銅鋳・鉄鋳・泥塑（でいそ）・石彫など 80 体余りの仏像を擁し、壁には代々の名士の題詠が彫られている。

懸空寺は中国で現在唯一つの「三教合一」寺院です。つまり三つの宗教、仏教、道教と儒教を一体化した寺院です。厳格に言うと、儒教は宗教ではありませんが、中国の民間ではそれを宗教にする場合もあります。懸空寺で一番高い所にある三教殿には、釈迦と、道教の老子と儒教の孔子の像を一室に集めています。

元来は【玄空閣】【玄】とは中国の道教の教理からでたもので、【空】は仏教の教理からきており、のちに懸空寺と改名。

１千数百年も耐えてきた木造建築の理由は、気象状況は日照時間が夏でも３時間足らずあった事と、冬は零下 20 度、**岸壁が風雨を保護した事と、材木は桐油を浸透させ防腐・防虫を防いだ事と、**「公輸天巧」**公輸とは、2000 年前に生きた職人公輸般のことであり、其の天才職人公輸般らによって綿密な計算の元において**建築した。

どうしてこんな断崖絶壁に寺を建てたか？実は、内モンゴルの信者が大桐・西安・洛阳に向かう道中の寺。懸空寺の下は重要な道で、人々は崖に寺を造り、信者の参拝に便宜を図ったのだ。このほか、下には川が流れておることから、大雨のため常に川の水が氾濫し、これは金の竜にたたりだと当時の人とは考えたので、仏塔の変わりにこの寺を立て、竜を退治しようと考えた挙句、断崖絶壁にこの寺を造った。岸壁に公輸天巧と明記している。「公輸天巧」とは、彼は中国の建築師が公認する鼻祖だ。この建築物は公輸般のような天才的職人だけが作り出せるという意味である。

懸空寺の主体は造で、建築面積はわずか 152.5 平方メートル、この狭い空間に大小 40 室もあります。懸空寺の各楼閣は木の板で造られた小道でつながっていて、小道は直接崖に建てられ、狭くて、一人しか通れないぐらいです。懸空寺のすべての重量は岩に差し込まれている片持ち梁で支えられているのです。これは最大の特徴です。この片持ち梁というのは懸空寺の楼閣の下から突き出された木の横の梁で、岩から伸び出したように見えます。このような横の梁は 27 本あり、すべての楼閣の台座はこのような横の梁にかかっています。

また、貼で荷重のかかる場所は全部精密に計算されたもので、重さを支える梁もあるし、楼閣のバランスの保つ梁もあります。

渾源県には次のような言い伝えがあります。「懸空寺、半天高、三根馬尾空中吊」、つまり、懸空寺は天の半分ぐらい高く、三本の柱で空中に吊られているという意味です。岩に横柱を打ち込み土台の現在の 3 本の縦柱以外は構造的な強度には、意味をなしていない。

中国文物局の建築専門家、羅哲文教授は、懸空寺の独特な設計は鳥の巣からヒントを得たものだとの事。

お寺の中の最も大きな建物、三官殿は、前面が木製の部屋で、後ろの岩壁に数多くの石窟を掘って、空間を広く、その中には多くのお堂があって、沢山の像が安置されています。銅や鉄で鋳造したものや、土で作られたもの、石に彫刻したものなど様々です。お堂の規模が小さいため、安置された像も比較的小さいものが多いです。

この上流には、ダムがある。当時の建築資材運搬道は見られない、ただ一つダム方向に向かって吊り橋が架けられた金具の後がある。

日本でも同様の寺院（鳥取県投込寺）が見られる。

観光化され現在は河底。右端に懸空寺

奥にはダム

現在は川底を行くが、当時の吊り橋跡

懸空寺の現在の石碑

懸空寺全体像広さ 152.5 平方メートル

岩に張り付つく形鳥の巣からヒント

冬は零下 20℃まで下がる　　夏でも日照時間は 3 時間　　岩に穴の堀**片持ち梁で支えられています。**

深く穴を彫り梁は楔で止めて有る。　　**梁は 27 本あり、**簡単な金具。　　１０数本の支柱は、補助的役目。

狭い通路、狭い空間には大小 40 室　　何故かここにも布袋様　　釈迦像

道教の老子と儒教の孔子、どの方が老子で孔子でしょうか？　　公輸天巧の壁字

善化寺：僧侶居ない寺。一部工事中で入れない、取っても広い境内。**一般に南寺と呼ばれており、大同市の市街の南部にある。**唐の開元年間に創建されたので開元寺と称し、五代後晋の時に大普恩寺と改称した。遼末に兵火で破壊されたが、金の天会 6 年（1128 年）、円重和尚の下で再建され、明の正統年間に現名になり、官吏が礼儀を習う場所とされた。寺は南向きで、中軸線に沿って天王殿（山門）、三聖殿（過殿）、大雄宝殿がある。大雄宝殿の東西には文殊閣と普賢閣がある（いずれも間口 3 間の方形二重軒の楼閣式建築であったが、東側の文殊閣はすでにない。）寺は全体として唐代の配置と風格を保った典型的な七堂伽藍様式の建築群である。**1445 年に現在の名称となった。**

寺院は南に面し、敷地は1万4000㎡と広大で、山門や三聖殿、大雄宝殿などが保存されている。中でも大雄宝殿は雄大である。建築様式は、遼（契丹族）や金（女真族）の意匠を色濃く映している。寺内には遼・金代の塑像 30 数体があり、中でも金代の塑像が佳作として知られている。山門外五龍が刻む照壁、大雄宝殿 24 天があり、遼（契丹族）、金（女真族）時代風格の建築様子、金代の 30 体の塑像が必見、特徴。

善化寺の建物のうち、大雄宝殿は遼代の遺構で金代に建て直されている。その他はすべて金代の建築で、規模といいプランの壮麗さといい、現存するものの中では最も保存状態がよく、規模の大きい遼金寺院建築群である。善化寺の天王殿は、実は山門で間口 5 間、奥行き 2 間の寄せ棟建築である。この建物は構造が変わっていて、斗拱が幾重にもなっていて美しく、明かに南方建築の特色がある。しかも殿宇は壮麗で、現存する金代山門の中では最も大きい．山門内の左右の四天王は明代の塑像、非常に大きく、地を踏まえ屋根を貫かんばかりに見える。三聖殿は俗に過殿という。間口 5 間、奥行き 4 間の寄せ棟造りで、殿前のテラスは 370 ㎡もある。総体としは、宋、遼建築の特徴が融合しており、金代初期建築の代表作である。特に軒下の斜拱は 60 度の角度で斜めに延び出し、咲き誇る花のよう

に大きくて美しい。これは金代の斜拱の中では最も大きくて華麗なものである。殿内は 4 本の柱だけで屋根を支えている。しかも天井がなくて小屋裏が露出しているので殿内が特に広く見える。
殿内に祭られているのは華厳三聖で、金代の塑像である。清の康熙年間に彩色しなおされているが、金代の風格は今も残っている。殿内にはまた非常に有名な石碑がある。すなわち南宋の朱弁が碑文を書いた「大金西京大普恩寺重修大殿記碑」である。朱弁は南宋が講和のために金に派遣した使節団の副使で、金に抑留されること 14 年に及んだが終始屈することがなかった。彼が幽閉されていたのがこの善化寺だったため、この石碑を書いたというわけである。大雄宝殿は寺の後部にある高さ 3m の基壇の上に建っている。間口 7 間、奥行き 5 間の寄棟造りで、仏殿前の牌楼と鐘鼓亭は明の万暦年間の増築である。大雄宝殿の天井の中心にある 8 角形の美しい折上天井は上に行くほど小さくなる形式で、遼代の木造組物の傑作。しかし、この中心に描かれた龍鳳の図柄は明代に書き加えられたものである。殿内正面の高さ 2.8m の蓮台には、高さ 4.05m の五方仏が安置されている。
真中の毘盧舎那仏の両脇に立つのは阿難と迦葉である。塑像と各種の飾り物はすべて遼代の作品である。東西壁際のレンガ製の台座に置かれているのは金代の塑像 24 諸天像である。中国には多くの 24 諸天があるが、善化寺のものは良く出来ている。塑像の中には文雅な文官もあれば勇猛な武将もある。また上品な貴婦人もいる。
この原形は現実生活から取られたものに違いなく、それゆえにまた生活の息吹に溢れているのであろう。このうち、東側の鬼子母神と六臂の日宮天子の像が特にみごとだ。鬼子母神は高さ 3.66m、高貴で美しい婦人の姿をしている。左の足元には青い顔、赤い髪、醜くて背の低い若い女の鬼がいる。これは鬼子母神が仏法に帰依する前、悪事を働いていた時の姿だという。二つが対照され、美は更に美しく、醜は更に醜悪となる。古の匠が工夫を凝らして考え出したのであろう。
6 臂の日宮太子は観音の化身だという。その塑像は自然かつ伸びやかで、繊細かつたおやかだ。これはもの静かでしとやかな女性の姿を写したもので、今にも動き出しそうな感じさえする。大雄宝殿西側の普賢閣は構造が応県の木塔によく似ている。これは大同地区に現存する唯一の遼、金期の楼閣建築である。善化寺の西院には五龍壁がある。これはもともと大同南門外の興国寺の前にあった照壁で、明の万暦年間に建造されたものだが、1980 年に解体、移築された。

間口 7 間大きな寄棟の大雄宝殿

立派な山号額

三世仏　毘盧舎那仏　阿難　迦葉

四天王

立派な鐘楼

立派な鼓楼

九龍壁：大同市市街の東街にある。1392 年、明の太祖朱元璋の第 13 子朱桂の屋敷の前に建てられた影壁（寺廟や大邸宅の大門の外側に立てられる壁）。邸宅は兵火で破壊され、九龍壁だけが残っている。長さは 45.5 メートル、高さ8メートル、厚さ2メートル。下部は須弥壇で、束腰の部分に獅子、虎、象、唐獅子、麟麟、天馬等の動物

が彫られており、その姿はそれぞれ異なり、躍動的である。頂部は木造建築に似せて、寄棟造りの屋根には棟飾りが備わる。壁面には高貴な者のシンボルである 9 匹の巨大な龍が五彩（黄・縁・朱・紫・藍）の彩色琉璃瓦の部材で積み上げられ描かれている。前には倒影池があり、壁の竜が水中に映ると、まるで生きているように見える。中国に現存する九龍壁は三つあり、大同のほかには北京の故宮と北海公園にある。 中国最大、1392 年作った、4 本爪九匹龍と獅子、天馬、麒麟、吉祥動物が生き生きされています。

上下華厳寺：僧侶居ない寺。全改装工事で中に入れません。大同市の西部にある。同じ場所に上下二つの華厳寺が建てられているが、別のものである。それぞれ、遼・金代の中国における華厳宗の重要寺院の一つである。上華厳寺の大雄宝殿は中国でも有数の伽藍のひとつといわれ、遼・金代の建物としては現存する最大規模のものといわれている。また、軒高 9.5 メートルの寄棟造りの屋根におかれた琉璃製の瓦もすばらしい。殿内には明代の 5 体の仏、20 本の諸天の塑像があるほか、清代の壁画も保存されている。下華厳寺の主要な建物である薄伽教蔵殿には、遼代の塑像が 31 体安置され、いずれも中国仏教芸術を代表する逸品といわれる。華厳寺内には、大同市博物館があり、その収蔵物は北魏の出土文物、遼代の芸術品に特徴がある。お寺は南に正門がありますが、このお寺は東向きです。

大同の華厳寺は非常に特色があり、文化的価値のある寺院である。華厳寺は漢、遼、金の文化が一体となった広大な建築群であり、独特の建築様式と高い芸術性を備えている。

遼代の皇帝は仏法を深く信奉した。特に道宗はそれが際立ち、その在位期間には華厳宗が非常に盛んになった。遼の清寧八年（1062 年）当時西京と呼ばれた大同に建立された華厳寺はこの気風の産物である。

華厳寺は宗教施設であっただけでなく、皇帝の石像や銅像を奉安する皇帝の祖廟でもあった。1963 年、上下華厳寺は合体し、華厳寺と呼ばれるようになった。しかし実際には、それぞれが独立した寺院の形を保っており、それぞれの山門から出入りしている。このうち上華厳寺は建物配置が型通り、中軸線に対称に分布している。中軸線上には山門、過殿（前殿）、大雄宝殿が並び、左右には祖師堂、禅堂、雲水堂などがある。

これに対して下華厳寺は比較的自由な構成で、薄伽教蔵殿が目立ち、付属的建物として山門、南北配殿、天王殿などがある。

華厳寺に行くと、この寺の向きが一般の寺とは違っていることに気がつく。主要な建築はみな東を向いているのである。これはこの寺が遼代に建てられてことに原因がある。すなわち、契丹人は太陽を拝む習慣があり、「契丹は鬼を好み、日を貴ぶ。毎月一日には東に向って礼拝」したからである（新五代史・契丹伝）。遼の建物はみな東を向いている。それゆえ遼が建てた寺院も当然東を向いているのである。

上華厳寺の中心をなす建物は 4m の基壇の上にそそり立つ大雄宝殿である。この殿宇は遼代の創建で、金の天眷 3 年（1140 年）に再建された。間口 9 間、奥行き 5 間の入母屋造りで、総面積は 1559 ㎡、遼金時代の仏殿では最大の規模を誇り、中国に現存する二大仏殿の一つでもある。

大雄宝殿の屋根は傾斜が緩やかで、斗拱も大きく、大棟の装飾も立派である。大棟の高さは 1.5m、鴟尾

《原文は「吻獣」。大棟の端にある装飾。日本では鴟尾として知られるが、中国では晩唐のころから動物を模したものになって吻獣と呼ばれるようになる。》の高さは 4.5m もあり、しかも金代のものである（南側の鴟尾は明代の填補）。
この大雄宝殿の建築年代は、漢族支配地域では北宋時代に当るが、建築の風格は雄渾な唐代の特徴を示している。これは華厳寺全体に通じる特徴でもある。その原因は、山西は五代の後晋のころから契丹が割拠していたために北宋の新技術が入らず、唐と遼の文化が融合したことにあると思われる。
大雄宝殿内正面の仏壇には高さ 3.1m の五方仏が端座している。このうち、中央の三尊は明の宣徳 2 年（1427 年）に住持の了然が北京で作らせたもので木彫だが、両側の二尊と脇時菩薩は塑像である。五尊の仏像は肉髻の上に桃のような突起があり、しかも顔の上が広くて下が狭い。これは漢族の地域の顎が豊かで耳の大きい仏像とは異なっており、むしろチベット式仏像の様式に通じるところがある。どうしてチベット様式になのか、その理由は今のところ明らかではない。
仏壇の両端にはさまざまな姿態と表情の二十諸天が立っている。この諸天も塑像である。像はすべて中央に 15 度傾いていて、見るに見やすいばかりでなく、諸天が五方仏を拝している感じが巧みに表現されている。
殿内にはもう一つはっきりと感じ取れることがある。それは仏像前の空間がとりわけ広々としていることである。これは設計者が殿内の空間を広げるため、前側の 12 本の柱を取り去ったからである。こんなに大きな木造建築で殿内の柱を減らしているのは、中国ではここだけである。
殿内の四方の壁は壁画で埋められている。面積は 890 ㎡ほどあり、清末の民間絵師董安の手になるものである。壁画の中には「七地九会」説法図がある。伝説によれば、釈迦が成道後一番始めに説いたのは華厳経で、しかも 7 ヶ所で 9 回説法して説き終わったと言う。この画面はこの故事に因んでいる。華厳寺の創設もこの故事を根拠としており、壁画と寺はいずれも華厳経の成立を記念しているのである。壁画は中国ではまれにみる巨大なもので、塗金も色彩も美しく、保存も非常によい。
大雄宝殿の東南にある薄伽経蔵殿、すなわち蔵経殿は遼の重熙 7 年（1038 年）の創建で、間口 5 間、奥行き 4 間の入母屋造りである。これもまた東向きに建てられた典型的な遼代寺院建築で、殿内の装飾、天井と仏像の網目模様光背が遼代の原物である。
仏殿の中央に祭られているのは、厳かな縦三世仏である《中国では釈迦、弥勒、燃灯の三仏が組み合わさった三世仏を縦三世仏という。これに対し釈迦、東方薬師、西方阿弥陀仏の組み合わせを横三世仏という》。その他の弟子、菩薩、供養童子は立ったもの、座ったものとさまざまだが、三組に分かれ、それぞれ三世仏の両側に配置されている。そして仏壇の四隅にはそれぞれ一尊の護法金剛（一説に四天王と言う）が立っている。
殿内の 31 体の塑像はみな遼代の彩色塑像で中国でも数少ない貴重な作品である。これらの塑像は個性的で、呼べば動き出しそうだ。細工は丁寧で流れるような感じがあり、生活の息吹さえ伝わってきて、思わず息を呑んでしまう。特に合掌し口元から歯をこぼれさせている菩薩は東方のビーナスと呼ばれる傑作である。この一事を見ても経蔵内の塑像の素晴らしさがわかるだろう。
経蔵殿では、仏祖の座っている宝座も珍しい。四層からなる蓮華宝座の花びらの一枚一枚に黄金の仏像が貼りつけられていて、とくに豪華である。
もっと素晴らしいのは殿内の 4 周に 2 段に並んでいる 38 の観音開き扉を持つ「壁蔵」である。壁蔵とは経巻を納める戸棚で、俗に経棚という。この壁蔵、西壁の窓の所では、細かい彫刻を施し天宮楼閣を模した壁蔵の模型を斗拱で窓の上にせり出し、さらに下側の拱橋を利用してこれを両側の壁蔵とつなげている。この結果、後壁には 5 つの窓が開いているのに、壁蔵が切れ目なく連なり、上下左右が一体をなしているかのように見える。
壁蔵の上段は仏龕、下段は経棚でいずれも精緻な彫刻が施されている。仏龕の屋根は入母屋で鴟尾もある。軒下の斗拱は今までに知られている遼代の斗拱の中でも最も複雑なものである。また欄干の腰板に

は 37 種類の図案が透かし彫りになっていて、これも数少ない遼代の木彫小品である。壁蔵は遼代木彫技術の水準の高さを示すものであり、1993 年に華厳寺を調査された梁思成教授は国内唯一の作品と認定されている。これを見ても、その芸術的価値の高さがわかる。】

再建中　入れません

再建中　入れません

再建中立派な鐘楼